

阪神・淡路大震災以降の活断層研究の進展と課題

堤 浩之（同志社大学）

ポイント

- 阪神・淡路大震災以降の活断層研究の進展と課題をレビューした。
- 近年の活断層のマッピングの進展は、詳細地形データの整備によるところが大きい。全国をカバーするデジタル活断層データの整備が進んだ。陸域と同等の精度での沿岸域の活断層のマッピングは今後の課題である。
- 近年発生した内陸直下型地震から活断層の活動の多様性に関する新たな知見が得られた。
 - 固有規模より小さな地震
 - 海溝型巨大地震に誘発される地震
 - 明瞭な活断層が認定されない地域で発生する地震
 - 大地震に誘発されて変位する活断層の存在
- 内陸地震のより高精度な長期評価に資するためには、活断層のマッピングや活動履歴調査の更なる進展・改善が必要である。

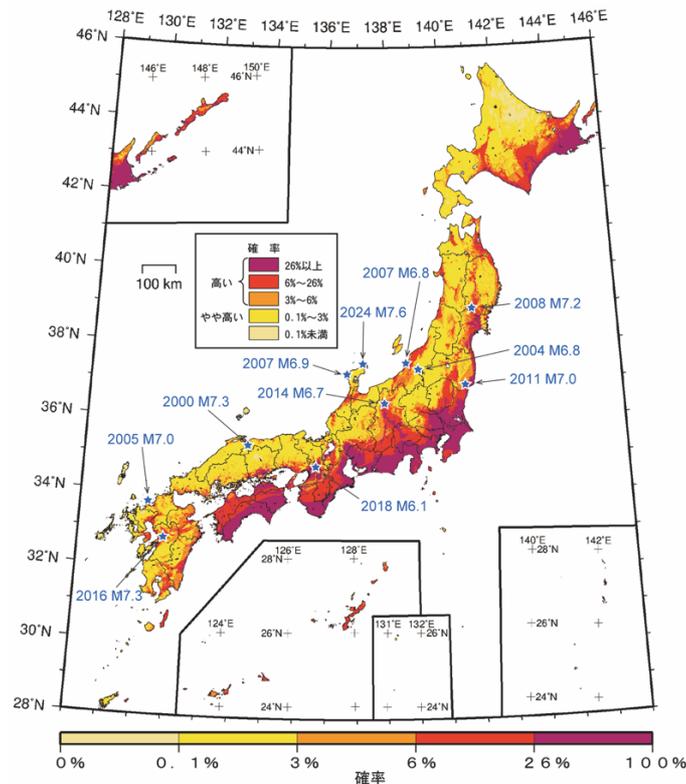


図1 1995年兵庫県南部地震以降の地震断層を伴う内陸直下型地震とその他の主な被害地震。背景図は、全国地震動予測地図2020年版（今後30年間に震度6弱以上の揺れに見舞われる確率）。

同志社大学 堤 浩之 資料